

利休七則

- 一、茶は眼のよきように点て
- 二、炭は湯の濁くように置き
- 三、花は野にあるように
- 四、夏は涼しく冬は暖かに
- 五、刻限は早めに
- 六、降らずとも傘の用意
- 七、相客にうつろせよ

利休7則はごく当たり前の事を言っています、その当たり前の事が出来れば免許皆伝です。

● 茶は眼のよきように点て

「眼のよきよう」とは、飲んだ人にとって「調度良い加減」という意味となります。

これは単に客の好みに合わせるということだけではありません。

その時その場所での客の気持ちを察して、「よく考えて点てるように」ということです。

+ お客様の気持ちや状況を考えて

● 炭は湯の濁くように置き

客前で茶を点てる場合、蓋に満たした湯を沸騰した状態にするためには、

蓋にたっぷり水を注ぎ、それを加熱し続け、そのための火を燵した炭を用意しなければなりません。勿論、風炉の準備も必要です。

中でも一番大切なのが、最初の火の調節ということになります。

全ては「湯の沸くように」に火力が維持されて、初めて加減が成立するわけですから。

ところが、一旦火を燵し、水を満たした蓋を乗せた後では、炭の調節はできません。そのため、予め最良の炭の置き方が求められるということなのです。

+ その仕事を達成する為にはタイムリーである事が大切で、要となるツボを押えて的確に準備・段取りが大切

● 花は野にあるように

利休は自然に生える花こそ美しい、尊いのだと語っています。「あるように」とい言う言い回しの意味が大事です、わずか一輪の花においてそれを表現するところに茶の花としての本当の風味があるといっている。

+ 研ぎ澄まされた感性は花一輪で表現出来る

● 夏は涼しく冬は暖かに

これは、単に温度が高いとか低いということではありません。

本来皮膚で感じている環境の変化を、耳や目によって察知とは異なる状態に感じさせる方法、つまり、感性による演出のことを言っているのです。

水や氷またはそれらを想像させるものは触れなくても「涼」を感じさせます。

自然と対抗しそれを克服しようというのではなく自然と一体となって生きていく盛夏の「朝茶事」は夏の生活を楽しむ。夏の朝の涼しさを味わうといった積極的な夏の楽しみ方。

+ お客様のもてなしは五感(見る、聞く、かく、味わう、触れる)で

● 刻限は早め

これも、単に時間厳守を説いているだけではありません。
ここで言う「刻限」とは「時刻」に対する意識・認識を指します。
つまり、それを「早め」とは、常に自分の中の時計の針を進めておくということです。
焦りがなく平常心でいることは、ゆとりを持って人に接するためにとっても大切なことです。

● 降りずとも縁の用齋

一言で言えば、備えを怠らない心掛けを説いていることになります。
露地後、露地下駄をいつもそろえておくなど心くばりを怠れない。臨機応変の処置ができるだけの心構えと準備をおこなってはならない。

● 相客にたいする心

「相」とは同席した客のこと。「心せよ」とは気を配らなるといっています。
自分勝手、得手勝手ではなくお互いに尊重し合い共に楽しいお茶事を通ず。
これこそが、茶の湯の真髄と言える言葉でしょう。
これはまた、「一期一会」の精神にもつながるごもいませ。

一期一会(いちいちい)といふことは、あなたとどうして出会っているこの時間は、二度と巡っては来ないたった一度きりのものです。だからこの一瞬を大切に思い、今出来る最高のおもてなしをしましょう。と言う意味の、千利休の茶道の心得です。

平たく言えば、これからも何處でも会うことはあるだろうが、もしかしたら二度とは会えないかもしれないという覚悟で人には接しなさい、ということです。

何も削るものがないところまで無駄を省いて、緊張感を作り出すというわび茶(草庵の茶)は当時の雅と唐物道具全盛期の華やかな茶の文化から、冷え枯れや侘びさびの茶道へと武野紹鷗や千利休によって完成されていきます。

茶道宗徧流は千利休の孫、千宗回の高弟、山田宗徧(1627～1708)を祖とする茶の湯の流儀。
鎌倉、京都南禅寺に道場があり、全国に支部があります。赤穂浪士討入に出て来る茶道が茶道宗徧流です。
流祖の「侘び茶」の心を現代に伝えています。